山口学芸研究 第11号 2020年 pp.87～102

# 創作音楽物語制作〈ピアノお話ワールド〉の意義と課題 ～自己評価による習熟度の可視化を基に～

本廣明美、岡本美恵*、脇淵陽子*、藤井亜希子*

# Significance and Future Issues of a Musical-Making Project *Piano Story World*: An Analysis Based on Visualized Proficiency through Self-Assessment

Akemi MOTOHIRO, Yoshie OKAMOTO, Yoko WAKIBUCHI, Akiko FUJII

## 1．はじめに

本学科では鍵盤の授業において、ピアノ力の中でも表現力養成に主眼を置いている。イメージを持ってピアノを弾くことこそが豊かなピアノ表現力になり、それがひいては自己表現能力の育成に繋がると考え、養成のキーワードとして「イメージの形成」と「表現力」を掲げている。この養成に当たっては、4年間を通して継続かつ段階別にカリキュラムを組んでいる。その最終プログラムが4年後期で行われる授業「鍵盤表現研究Ⅱ」の創作音楽物語制作であり、〈ピアノお話ワールド〉と名づけている。

本授業では、大きく二つのテーマを設け授業を展開している。それはピアノ学習の最終段階ということで、総合的なピアノ表現力養成を目指すこと、もう一つは大学で培ったピアノ力を現場で活用できるものとすることである。単にピアノ曲を奏でる演奏力の修得ではなく、イメージの形成や拡大に視点をおいた深い学びからの読譜を通して、現場で多岐に渡って活用できるピアノ表現力を養成するものである。

〈ピアノお話ワールド〉の具体的な内容としては、まず、創作したい話にふさわしい曲または弾きたいと思ういくつかのピアノ曲を選曲する。それぞれのピアノ曲についてしっかりと読譜し、分析を行いその曲の音楽構成要素の組み合わせからイメージを沸かせ、曲の理解をする。次にその抱いたイメージを、言語を用いた表現活動であるお話創作とも合わせながら膨らませ、自分なりに表現したい世界をピアノ曲で奏でる音楽で構築していくものである。

既に、イメージ形成に主眼を置いたこの手法は、ピアノ表現力の向上に確かに効率的に結びついていくものであることを考察した[1) 2)]。また、ピアノ表現力養成の構造化の在り方を次のように論じた。「様々な音楽構成要素を読譜し、それらを身体で感じ取り、あわせてイメージを持つことが大切である。これらの3要素である“読譜力”“音楽を身体で感じる能力”“イメージ力”は順次段階を追って養成されるものではなく、本来は同時に養成されるものであり、それぞれの要素が相関関係にあると言える。また、表現の際、読譜がしっかりと出来ていなければ、楽譜情

* 山口学芸大学　非常勤講師

報が少ないため、イメージ起こしが出来ず、無味乾燥な表現になるのは言うまでも無く、イメージがしっかりとつかめなければ、表現には結びつかないと考える。」[3)]

長年授業する中で、ピアノ表現力養成について多くの成果はあがっているという実感はある。授業後に行う学生のアンケートからも、イメージ起こしがスムーズになり、ピアノ曲をどう弾いたらよいのかが自分なりに理解でき、表現することが楽しくなったという声は寄せられている。しかし、どのような表現力がどの程度修得されたのか明白ではない。そこで本授業の物語制作を通して、学生の自己評価したものを基に、表現力獲得の習熟度を「可視化」することにより、明らかにしたいと考えた。

そこで本研究では、授業の目標を達成するために、授業の活動内容をいくつかの項目に細分化し、評価項目を設定した。それらの達成度を、学習指導要領や幼稚園教育要領に掲げられている目標や評価観点別能力と照らし合わせ数値化を試みることで、個人の事例を踏まえ、効率的な表現力指導について考えることにする。更に、この評価観点別能力の習熟度とピアノ表現力養成の構造化の在り方における養成の段階や要素における能力の習熟度との関係を探ることで、授業の意義を再確認し、ピアノ表現力の養成の向上に結びつく指導の一助にしたいと考える。

## ２．授業目的と評価

1）授業の達成目標と授業内容、評価項目と評価の設定

本授業では、学生の表現力に主眼を置いた統合的なピアノ力と教育・保育現場における実践力の養成を目的として、授業の達成目標を（表 1）のように設定している[4)]。

（表１）授業の達成目標

| |
|---|
| 1. 保育・教育現場でのピアノ表現の生かし方を知る。 |
| 2. ピアノ曲に対してのイメージを、主体的に表現することができる。 |
| 3. お話に合わせたピアノ表現を考えることができる。 |
| 4. 創造性豊かに、作品を創作することができる。 |

そして、授業内容は（表 2）のように行っている[4)]。

（表２）授業内容

| | |
|---|---|
| 1. 題材の決定 | 7. ピアノ曲及び弾き歌い曲の実技演習 |
| 2. テーマの決定 | 8. ピアノ表現とアレンジ（イメージを表現） |
| 3. 話の創作 | 9. お話とピアノ及び弾き歌い曲のすりあわせ |
| 4. 各場面のピアノ曲及び弾き歌い曲の選定 | 10. 読み合わせとピアノ演奏 |
| 5. 場面におけるピアノ曲及び弾き歌い曲のイメージ付け | 11. 発表と意見・感想交換 |
| 6. それぞれのピアノ曲及び弾き歌い曲のイメージ付け（言語で表現） | 12. 全体発表とまとめ |

授業内容と授業の達成目標に合わせて、具体的に評価項目を（表 3）の通りに設定した。評価する項目をより細分化させて、どの能力がどの位獲得できたか数値化することで、学生個人または学生全体の獲得能力を可視化できると考えた。それぞれの評価項目について、学習指導要領の評価観点と照らし合わせて、「意欲・関心」「思考・判断」「知識・理解」「技能」「表現」の 5 つのうち、どの能力に当たるか分類した[5)]。（表 2）の「11. 発表と意見・感想交換」が終わった時点で学生自身がそれぞれの評価項目に対して 5 段階で評価して、授業の履修者 36 名の学生全体平均点を出した。それと同時に､学生自身が自分の作品に対して満点を 100 %として満足度を付けた。それを平均したものは 70.0 %であった。授業内容の欄は（表 2）の番号を、授業の達成目標の欄は（表 1）の番号を示している。

（表３）評価項目

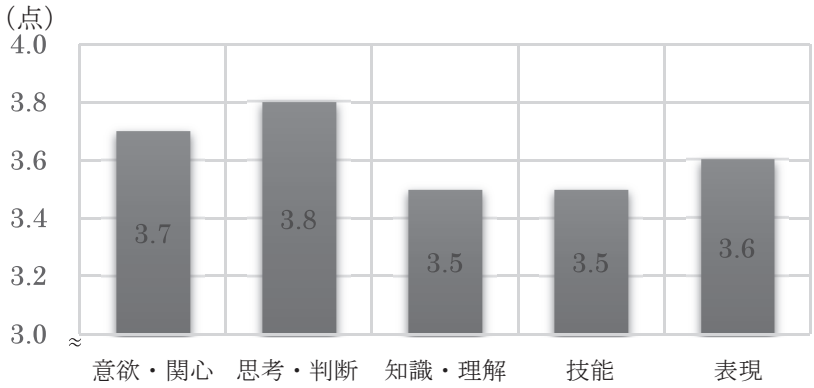
| 授業内容 | 達成目標 | 評価項目 | 評価観点別能力 | 学生全体平均点 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 1）子どもを対象として題材を考えることができたか。 | 思考・判断 | 4.1 |
| | 1 | 2）子どもが、身近に感じ興味が持てる題材であるか。 | 思考・判断 | 3.9 |
| 2 | 1 | 1）子どもにとって分かりやすく、興味が持てるものであるか。 | 思考・判断 | 3.7 |
| 3 | 1 | 1）話の構成が分かりやすく、興味が持てるものであるか。 | 思考・判断 | 3.7 |
| 4 | 3 | 1）自分で選定した曲の楽譜を探すことができたか。 | 意欲・関心 | 4.2 |
| | 3 | 2）選定した曲が自分の演奏能力にあった楽譜であるか。 | 知識・理解 | 3.5 |
| | 2 | 3）選定した曲の特徴（リズムや曲の雰囲気など）を把握しているか。 | 知識・理解 | 3.9 |
| 5 | 2 | 1）場面において、イメージ（動作、感情、情景描写の表現）に応じた曲を選んでいるか。 | 思考・判断 | 4.1 |
| | 2 | 2）場面のイメージに合った曲の構成要素（テンポ、調性、拍子、奏法など）を理解しているか。 | 知識・理解 | 3.7 |
| | 2 | 3）ピアノ曲全体を使用するか､部分的に使うか考えることができたか。 | 思考・判断 | 4.0 |
| 6 | 2 | 1）選曲した曲の特徴（曲想の変化、和音の響きなど）を捉え、お話が作成できているか。 | 表現 | 3.8 |
| | 2 | 2）情景や主人公の行動、気持ちなどを言葉で表現し、曲の特徴につなげて考えることができているか。 | 思考・判断 | 3.8 |
| | 1 | 3）場面のイメージを、子どもにわかりやすく言葉やイラストなどで表現できているか。 | 表現 | 3.3 |
| 7 | 3 | 1）曲の拍子・リズム・強弱・速度など、読譜を正しく行った上で、演奏することができたか。 | 知識・理解<br>技能 | 2.9 |
| | 3 | 2）曲を丁寧に、表情豊かに弾こうとしているか。 | 表現、技能 | 3.5 |
| | 3 | 3）曲が弾けるように、練習することができたか。 | 意欲・関心<br>技能 | 3.6 |
| | 3 | 4）イメージをピアノで表現することに対して、楽しく活動することができたか。 | 意欲・関心 | 4.0 |
| 8 | 3 | 1）お話の場面の長さに応じて、選んだ曲をアレンジすることができたか。（曲の長さをカットする、延ばす、繰り返すなど） | 思考・判断 | 3.8 |
| | 2 | 2）イメージを表現するために、音の高さや速度を変えるなどの工夫をすることができたか。 | 思考・判断<br>表現 | 3.3 |
| 9 | 4 | 1）お話とピアノを合わせる中で、曲の長さや、ピアノ曲のつなぎ部分の工夫、曲やお話の入るタイミングなど工夫することができたか。 | 思考・判断 | 3.5 |
| | 4 | 2）お話の進み方に応じて、速さや強弱など、工夫がみられるか。 | 表現、技能 | 3.2 |
| | 4 | 3）ポイントとなる言葉と音のタイミングや効果音などを工夫することができたか。 | 意欲・関心<br>表現 | 3.0 |
| 10 | 1-4 | 1）お話とピアノ曲のバランスを考えることができたか。 | 表現、技能 | 3.7 |
| | 1-4 | 2）読み手に対して、読むスピードや声の表情やタイミングを伝えることができたか。 | 意欲・関心 | 3.8 |
| | 1-4 | 3）読み手とタイミングが合っているか。 | 表現、技能 | 4.1 |
| 11 | 1 | 1）子どもの前で発表することを想定した上で発表できたか。 | 思考・判断 | 3.6 |
| | 2.3.4 | 2）自分の表現したいイメージ通りのお話と演奏の創作ができたか。 | 表現 | 4.1 |
| | 3 | 3）お話に合わせてピアノ表現をすることができたか。 | 表現、技能 | 3.6 |

2）考察

今回、自己評価点を出すことにより、授業の達成目標と学生の獲得能力について数値によって知ることができた。授業の達成目標の学生全体平均点については、次のようになった。

| | |
|---|---|
| 1. 保育・教育現場でのピアノ表現の生かし方を知る。 | 3.7 点 |
| 2. ピアノ曲に対してのイメージを、主体的に表現することができる。 | 4.0 点 |
| 3. お話に合わせたピアノ表現を考えることができる。 | 3.8 点 |
| 4. 創造性豊かに、作品を創作することができる。 | 3.8 点 |

学生全体平均点を見ると、特に「2. ピアノ曲に対してのイメージを、主体的に表現することができる」は 4.0 点であり、他の項目に比べて出来たと感じる学生が多いことが分かる。学生たちは、音楽の雰囲気や曲の特徴を感じ取り、意欲を持ってピアノ曲に対してのイメージを形成していくことができたと思われる。本授業で、音楽のイメージに合わせてお話を作り、ピアノの演奏表現を工夫することを通して、学生たちがピアノ曲に対してのイメージを主体的に表現することができたと感じられたということである。また、「1. 保育・教育現場でのピアノ表現の生かし方を知る」は、他の項目に比べたら低いという結果であった。




（図 1）評価観点別能力の学年全体平均点

次に、評価観点別能力ごとの学生全体平均点を（図 1）に示す。これらの 5 つの能力の平均値は、3.6 点である。「思考・判断」が一番高く 3.8 点であり、次に「意欲・関心」が 3.7 点で、「表現」は平均値と同じ 3.6 点で、「知識・理解」と「技能」が 3.5 点と平均値より少し低い。教員も学生に対する評価をしたが、「意欲・関心」は 3.8 点、「思考・判断」は 3.9 点、「知識・理解」は 3.5 点、「技能」は 3.4 点、「表現」は 3.6 点と、学生とほぼ同じ結果が出ている [6)]。平成 20 年度学習指導要領では、知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の能力をバランスよく養成することが重視されており、その枠組みや教育内容を維持した上で、平成 29 年度学習指導要領では、「知識・理解」の質を更に高め、確かな学力を育成することとしている [7)]。評価観点別能力の「知識・理解」と「技能」が 3.5 点と低くなっているが、これらの能力を高めていく必要がある。

本授業では、ピアノの表現力養成を目的としており、まずは学生がどのような表現力を獲得できたのかについてみていく。（表 3）によると、平均値 3.6 点より高い「表現」の項目から、どのような表現力が獲得できたかが分かる。そこで、以下の 4 項目に注目することにする。

（表４）平均値より高い「表現」項目

| | |
|---|---|
| 6-1） | 選曲した曲の特徴（曲想の変化、和音の響きなど）を捉え、お話が作成できているか。 |
| 10-1） | お話とピアノ曲のバランスを考えることができたか。 |
| 10-3） | 読み手とタイミングが合っているか。 |
| 11-2） | 自分の表現したいイメージ通りのお話と演奏の創作ができたか。 |

「表現」については、音楽の特徴を言葉で捉えてお話を作り、発表に向けた練習でナレーターとピアノの音量のバランスや演奏のタイミングを合わせたりすることができ、最終的に自分の表現したいイメージ通りのお話と演奏の創作ができた、と学生たちは評価した。

また、「表現」について平均値より低かった項目に注目する。

（表５）平均値より低い「表現」項目

| | |
|---|---|
| 6-3） | 場面のイメージを、子どもにわかりやすく言葉やイラストなどで表現できているか。 |
| 7-2） | 曲を丁寧に、表情豊かに弾こうとしているか。 |
| 8-2） | イメージを表現するために、音の高さや速度を変えるなどの工夫をすることができたか。 |
| 9-2） | お話の進み方に応じて、速さや強弱など、工夫が見られるか。 |
| 9-3） | ポイントとなる言葉と音のタイミングや効果音などを工夫することができたか。 |

言語での表現や、イラストの作成、ピアノでの表現や演奏の工夫、お話とピアノを合わせて創作する段階の工夫について低く評価した。「表現」について、高く評価した項目は、読み手と合わせたり発表する段階のものが多く、低く評価した項目は、一人で創作をする段階のものが多い。

次は、「表現」以外の評価観点別能力で平均値が高い項目についてみていく。平均値より高い項目は 15 項目と多いので、特に高い 4.0 点以上の項目についてみていくことにする。

（表６）平均値より高い「表現」項目以外の項目

| | | |
|---|---|---|
| 0-1） | 子どもを対象として題材を考えることができたか。 | 思考・判断 |
| 4-1） | 自分で選定した曲の楽譜を探すことができたか。 | 意欲・関心 |
| 5-1） | 場面において、イメージ（動作、感情、情景描写の表現）に応じた曲を選んでいるか。 | 思考・判断 |
| 5-3） | ピアノ曲全体を使用するか、部分的に使うか考えることができたか。 | 思考・判断 |
| 7-4） | イメージをピアノで表現することに対して、楽しく活動することができたか。 | 意欲・関心 |
| 10-3） | 読み手とタイミングが合っているか。 | 表現、技能 |

この６項目中５項目が「意欲・関心」と「思考・判断」の項目となっているが、「知識・理解」の項目は入っていない。全項目の中で、一番高いのは、4-1）の 4.2 点であった。これらの項目からは、活動内容としては子どもを対象としたお話を作ることができ、お話に合った曲を場面ごとに選ぶことができる。また、曲のどの部分を使うか考えられ、楽しく活動でき、読み手と上手に合わせることができる能力が養成された、と思われる。言い換えれば、意欲・関心を持って創作場面でいろいろ工夫をしながら学習できたことが読みとれる。観点別能力においても「意欲・関心」と「思考・判断」が多い。

次は、平均値よりも低い項目についてみていく。評価項目は、授業を行う順に並んでいるので、平均値より低い項目を順に見ていくとどの段階に問題があるのかが分かる。以下は、平均値 3.6 点より低い項目である。再度「表現」の項目を含めて、取り上げる。

（表７）全項目中の平均値より低い項目

| | |
|---|---|
| 4-2）　選定した曲が自分の演奏能力にあった楽譜であるか。 | 知識・理解 |
| 6-3）　場面のイメージを、子どもにわかりやすく言葉やイラストなどで表現できているか。 | 表現 |
| 7-1）　曲の拍子・リズム・強弱・速度など、読譜を正しく行った上で、演奏することができたか。 | 知識・理解<br>技能 |
| 7-2）　曲を丁寧に、表情豊かに弾こうとしているか。 | 表現、技能 |
| 8-2）　イメージを表現するために、音の高さや速度を変えるなどの工夫をすることができたか。 | 思考・判断<br>表現 |
| 9-1）　お話とピアノを合わせる中で、曲の長さや、ピアノ曲のつなぎ部分の工夫、曲やお話の入るタイミングなど工夫することができたか。 | 思考・判断 |
| 9-2）　お話の進み方に応じて、速さや強弱など、工夫が見られるか。 | 表現、技能 |
| 9-3）　ポイントとなる言葉と音のタイミングや効果音などを工夫することができたか。 | 意欲・関心<br>表現 |

これを見ると、4-1）から自分で弾きたい曲の楽譜は探せるが、4-2）からそれが自分の演奏能力にあった楽譜ではないことが分かる。このことから、選曲はできるが、自分の演奏能力よりも高い楽譜のため、読譜して演奏することが難しい。授業内容の「8.　ピアノ表現とアレンジ（イメージを表現）」の段階のお話に合わせて音の高さや速度を変えることの工夫や、授業内容の「9.　お話とピアノ及び弾き歌い曲のすりあわせ」にあたる段階でのお話とピアノを合わせるタイミングを工夫することが難しく、効果音を入れる工夫があまりないということを学生たちは評価した。全項目の中で、「7-1）曲の拍子・リズム・強弱・速度など、読譜を正しく行った上で、演奏することができたか」は 2.9 点と最も低い。これは、「知識・理解」「技能」の項目であるが、前述の評価観点別能力においても「知識・理解」と「技能」が低いという結果が出ており、高める必要のある能力である。「表現」の低い項目は、「技能」と合わさったものが多く、表現力をつけるためには技能を高めることは否めないと考える。自分の演奏能力にあった楽譜を選んで正確に音を読み取って演奏ができるように、読譜に関する指導を積極的に行う必要があることが評価項目の学生全体平均点から読み取れた。

また、学生が自分の作品に対する満足度の平均値は 70.0 %であった。評価項目の「5-1）場面において、イメージ（動作、感情、情景描写の表現）に応じた曲を選んでいるか（4.1 点）」、「6-1）選曲した曲の特徴（曲想の変化、和音の響きなど）を捉え、お話が作成できているか（3.8 点）」、「6-2）情景や主人公の行動、気持ちなどを言葉で表現し、曲の特徴につなげて考えることができているか（3.8 点）」、「11-2）自分の表現したいイメージ通りのお話と演奏の創作ができたか（4.1 点）」、と作品の創作に関する項目を高く評価していることからみると、満足度 70.0 %はあまり高い数値ではない。これは発表後に自己評価したもので、「11-1）子どもの前で発表することを想定した上で発表できたか（3.6 点）」、「11-3）お話に合わせてピアノ表現をすることができたか（3.6 点）」、が平均値と同じ点であり、自分の作品を発表した経験と、人の作品を鑑賞し自分の作品と比べて、自分はもっとこのように出来る、こうすればよかったなどの思いが芽生えたりしたことが、あまり高くない評価につながったのではないかと推測できる。

## ３．実践研究

３名の学生の作品を取りあげ、学習成果の分析を通してどのような能力が獲得されていったかについて考察する。

1）Ａさんの事例

「ピアノお話ワールド」の制作過程に必要なことの一つにいかに思い描く場面にふさわしいイメージの曲をつけられるかという「選曲」があり、多くの曲を知っていることや正しい音楽知識を持ち楽譜を見ているということが重要である。これらは評価観点別能力では「知識・理解」と

しているが、学生のこの評価観点別能力にあたる項目への取組みと変化に着眼し学生Ａさんの制作過程を見ていきたい。

学生Ａさんは保育職を希望している。ピアノ学習歴は４歳から現在までで、ピアノ演奏能力は大学の設定するグレードでは４グレード制のＡグレード（ソナチネ程度）である。好きな曲はドビュッシーやショパンの作品であり、好きな音楽ジャンルはJ-pop（ジャニーズ）である。制作に入る前の学生への事前調査で、「話を作ることに興味があるか」また、「物づくりにおいて、いろいろ想像したり、創意工夫したりすることに興味があるか」を尋ねたところ、「想像することが好きだ」という回答をした。そのため創作に関わる行程の半分の期間をかけて物語を考えた。幼児でもわかりやすく身近に感じられる『友だち』をテーマとし、物語を作成していく上で幼い子どもが共感しやすく、また想像しやすい自ら体験しているような事柄が良いのでは、と時間を費やして教員と話し合い、何かを失くす・壊してしまうという日常に起こり得るハプニングを入れることにした。

まずＡさんは次の２つの話を考えて来た。

① 主人公が友だちの誕生日のためにプレゼントを作ったのだが、それを失くしてしまい、仲間と一緒に探して見つけ出す

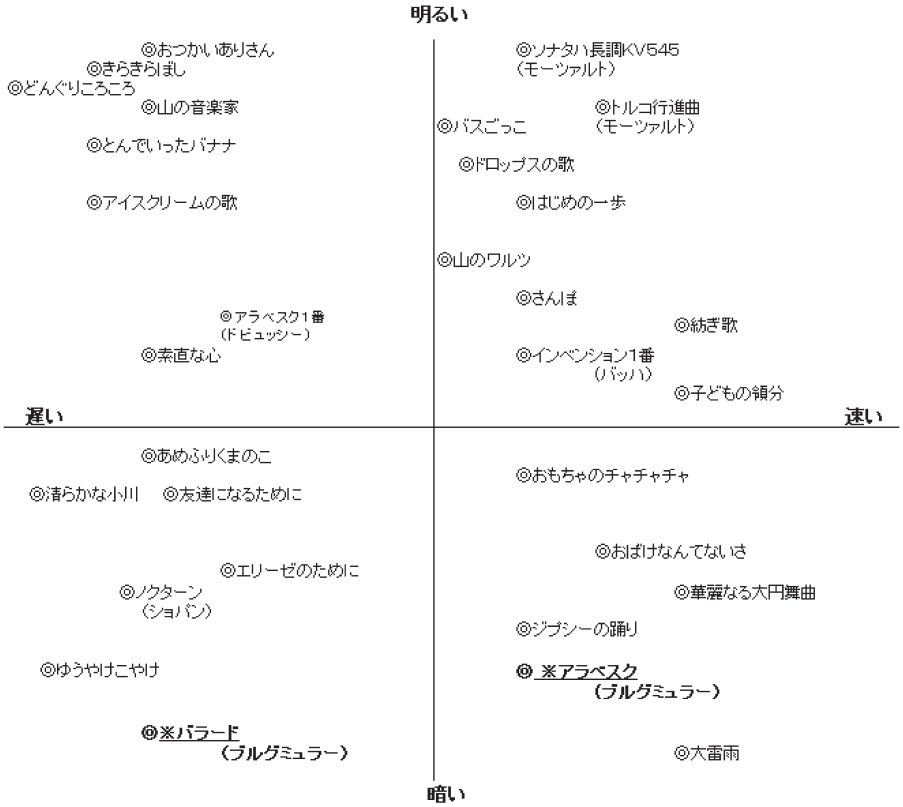
② 家でのお誕生日ケーキ作りをするが、完成したものを誰かに食べられてしまい、もう一度仲間と力を合わせて完成する

どちらも“誕生日”と“仲間・友だち”また、“力を合わせ何かを達成する”という、子どもにとって大変身近で興味を引きやすい素材を用いている。これは幼児期に育みたい「人間関係」や「社会生活との関わり」[8)] に通じており、家庭を離れた子どもたちが家族以外の相手と過ごし、協同性や社会性を築く中において共感しやすくわかりやすいテーマになっている。２つの話を創作していたＡさんだったが、“友だち”というテーマであれば家の中だけで話を完結するよりも家の外に出る場面を作った方が、より多くの登場人物を主人公に絡ませることができ話に変化が生まれるだろうと、話のあらすじは①に決定した。家の外に出て仲間と協力していくという姿は、子どもの「社会との関わり」と「言葉による伝え合い」[8)] にも自然と繋がっていくことができる。また情景を想像したり、この後の各場面における曲のイメージ付けをする上で、家の外というものは様々な色彩や、動きを表現の一つとして入れていくことができるため、より一層の脚色が可能になると考えた。

ストーリーの概略ができたところで各場面への曲選択の段階に入り、これまで学習してきた曲をＡさんがどのように捉えているか、縦軸には曲のイメージとして〈明暗〉、横軸には〈速遅〉などの要素がどのように当てはまるかをピアノ曲イメージ表（表８）に記入させていった。

（表８）には様々な曲が記入されたが、すでに学習してきたピアノ曲にも関わらず楽曲の中にある指示された速度記号や曲想記号を意識していない曲があることに気がついた。例えばブルグミュラー作曲の※『アラベスク』を見てみると、速度記号は“Allegro”、曲想は“Scherzando”とあり、“速く”、“おどけたように”、という意味であるが、Ａさんの表には中くらいよりやや速いあたりにこの曲を書いている。楽譜の速度表記は♩＝152とかなり速い指定となっているが、Ａさんにとってこの曲は速い曲である、という認識がないように思える。また、同じくブルグミュラー作曲の※『バラード』も本来“Allegro con brio”という“生き生きとして速く”という曲想になっているが、表に書き入れてある箇所には暗くやや遅いあたりに記入されている。このことから楽曲を練習し弾くことはできるようになるが、技術的なことに一生懸命になり楽譜に書かれているその曲に関する情報が正しく読み取れず、記載してある速度記号や曲想記号などは理解できていなかったのではないだろうか。そのため曲の特徴は変化してしまい、その結果、曲のイメージの把握、表現に行きつけずに学習を終えてしまった可能性があるのではないかと考えられる。

（表８）～Ａさんによるピアノ曲イメージ表～




評価項目「7-1）曲の拍子・強弱・速度など読譜を正しく行った上で、演奏することができたか」では、Ａさんは３点の評価をしており自身の知識理解について再度見直す必要を感じたものと考えられる。この表の曲を参考に再び使用したい楽曲を読み直し、曲想、速度についてもＡさんが作ったお話にふさわしい楽曲を選んでいくことにした。同時に選曲した曲の音楽用語などを意識し物語の登場人物の心情に合わせているかという事にも注目しながら、まず場面を大きく４つに構成し〈第１案〉のように４曲当てはめてみた。

しかし物語の言葉選びや登場人物の変更、心情の変化などの制作を進めていくうちに、Ａさんが初めに選んでいた曲のうち、①のわくわくという気持ちをイ短調で表すことに違和感を覚えたり、②のバラードの冒頭の misterioso という曲想が、必要以上に緊張を伴い不安な気持ちをイメージしていたり、③の場面ですでにハッピーエンドになって終わってしまったかのような明るさの選曲だったなどの曲と物語のイメージが合致しないところが出てきたため、再度選ぶ楽曲の速度、調性、曲想などを確かめることを指導し曲目を〈第２案〉のように変更していくことにした。さらに聞き手に物語の内容がわかりやすく展開するために場面を増やしていくことで、最後の場面への盛り上がりを作ることができた。

〈第１案〉

| 場面　イメージ | 曲目 | 速度・曲想・調性など |
|---|---|---|
| ①友だちへの誕生日プレゼントを作った。明るい・わくわくする<br>（喜ばせたい気持ちを 16 分音符で表現） | トルコ行進曲<br>（モーツァルト） | Allegretto<br>Alla turca　イ短調 |
| ②プレゼントをなくしてしまった。 暗い・悲しみ<br>（不安・困ったという気持ちをハ短調の和音で表現） | バラード<br>（ブルグミュラー） | Allegro con brio<br>misterioso　ハ短調 |
| ③仲間と一緒にあちこちを探す。明るい・元気よく<br>（友達との連帯感を感じられる元気のよい曲　行進曲風で表現） | ぼくのミックスジュース（渋谷毅） | Allegro　♩=136<br>元気よく　ニ長調 |
| ④プレゼントを見つけて渡す。明るい・嬉しい・温かい気持ち<br>（レガートの多い穏やかなメロディで表現） | 嵐 One Love<br>（加藤裕介） | Moderato ♩ = 102<br>変ロ長調 |

〈第２案〉

| 場面　イメージ | 曲目 | 速度・曲想・調性など |
|---|---|---|
| ①友だちへの誕生日プレゼントを作った。明るい・ワクワクする<br>（明るい印象、生き生きするをニ長調の 16 分音符で表現） | ソナタ Hob.XVI-37<br>（ハイドン） | Allegro con brio<br>ニ長調 |
| ②プレゼントをなくしてしまった。暗い・困った<br>（不安はあるが速すぎないテンポで表現） | ジプシー<br>（ブルグミュラー） | Allegro non troppo<br>ハ短調 |
| ③プレゼントを見つけたがひと悶着起こる。　迷う・考える<br>（ドキドキした気持ちを左手の 8 分音符で表現） | 紡ぎ歌<br>（エルメンライヒ） | Allegretto<br>leggiero　ヘ長調 |
| ④プレゼントを無事返してもらう。明るい・嬉しい・喜び<br>（友好的・楽しい気持ちをラグのリズムで表現） | メープルリーフ・ラグ<br>（ジョプリン） | Tempo di Marcia<br>Rag　　変イ長調 |
| ⑤プレゼントを届ける。明るい・嬉しい・温かい気持ち<br>（レガートの多い穏やかなメロディで表現） | （嵐）One Love<br>（第１案と同じ曲）<br>（加藤裕介） | Moderato ♩ =102<br>変ロ長調 |

場面に応じてふさわしいと思われる選曲ができたＡさんは、評価項目（各場面のピアノ曲及び弾き歌い曲の選定）について自分の演奏能力にあった曲を選択することに全て 5 点満点の評価をした。また評価観点の意欲・関心には 4 点をつけ、創作過程において意欲的に取り組めたことが窺える。音楽的知識を正しく理解し楽譜を読み取り楽譜を再確認することで選んだ曲に書かれている曲想に沿って弾くことができ、場面のイメージにふさわしい雰囲気の曲を調性やリズム、曲想等をお話と照らし合わせ考えることが可能になり、その結果、子どもたちへわかりやすくイメージの共有を図れるよう工夫することができた。

最後に授業の達成目標について、Ａさんはほぼ学年平均と同じ達成度を獲得しており自分の作品の満足度も 80 %となっている。特に評価項目「4-3）選定した曲の特徴を把握しているか」では学年平均 3.9 点に対し 5 点満点を付けており、2 度に渡ってお話にふさわしい曲を選定した際に読譜の大切さを覚えながら「知識・理解」を深めていったものと思われ、この授業で一定の成果を上げていったものであると考えられる。

2）Ｂさんの事例

Ｂさんは小学校１年生の時からピアノを習い始め、小学校６年生まで継続して、一旦中断したが高校３年生から再開している。Ｂさんの今までの経験の中で好きなピアノ曲や特に印象に残った曲は、ショパンの前奏曲『雨だれ』やワルツ第９番、『RAIN』（SEKAI　NO　OWARI）であり、『RAIN』は今回の創作でも使用している。授業の事前調査によると、授業を受けた理由について「芸術性を高めていくため。子どもたちと一緒に物語などを作る際に生かしていきたい」と書いている。

Ｂさんの評価観点別能力の点数を５点満点で自己評価させた結果、学生全体平均点と比較したものを下記に示す。

| 評価観点別能力 | 意欲・関心 | 思考・判断 | 知識・理解 | 技能 | 表現 |
|---|---|---|---|---|---|
| Ｂさんの点 | 4.2 | 3.6 | 4.3 | 4.1 | 3.6 |
| 学生全体平均点 | 3.7 | 3.8 | 3.5 | 3.5 | 3.6 |

Ｂさんは「意欲・関心」「知識・理解」「技能」の能力が平均点より高い。評価観点別能力の「知識・理解」「技能」にあたる項目の「7-1）曲の拍子・リズム・強弱・速度など、読譜を正しく行った上で、演奏することができたか」において学生全体平均点は2.9点と最も低かったが、Ｂさんは４点と高い。

では、具体的にＢさんの創作の過程について見ていくことにする。お話の題は「ゆずの大冒険」で、幼稚園に通うゆずちゃんという女の子が主人公である。あらすじは幼稚園から帰ってその夜に見た夢の中で、ピーチという妖精とのお話が展開した後、次の日の朝起きて幼稚園へ行く準備をするというお話である。Ｂさんは、曲を選んでからお話を考える順で創作を進めていった。最初にＢさんの好きな曲である『RAIN』（SEKAI　NO　OWARI）を選び、演奏の練習にとりかかった。一曲目を決めた時点で、どのようなストーリーにするか考え始めている。イメージを膨らませながら、『すみれ』（ストリーボッグ）『人形の夢と目覚め』（エステン）と徐々に曲を増やしている。曲が弾けるようになり、どのような曲か分かってくると、引き続きお話の構成を考えて『忘れな草』（リヒナー）を追加し、さらに自分で作った効果音も入れている。曲をどこまで使うか、どの部分にどの言葉を当てはめたらよいか、じっくり考えてお話を完成させている

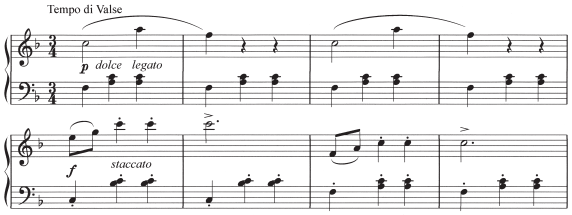
曲の構成は、『すみれ』①―『子守唄』―『RAIN』①―自分で作った効果音―『RAIN』②―『すみれ』②―『すみれ』③―『忘れな草』―『RAIN』③―『RAIN』④―『お人形の目覚め』―『お人形の踊り』となっている。①②③④と示している曲は、全部、曲の中の違う部分を使用している。主人公が起きている時はクラシックを使い、夢の中のお話はクラシックを少なくしてポップスを多く使うなど、それぞれの世界を音楽ジャンルの違いで上手に表現している。実際に、作品の一部を楽譜と共にみていく。例として、『すみれ』と『忘れな草』を取り上げる。

(1)『すみれ』

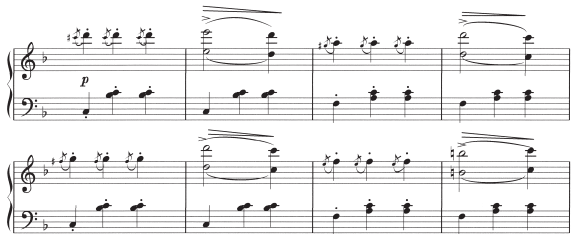
①（1小節から8小節）…

ヘ長調4分の3拍子の明るい響きと弾むようなワルツのリズムの曲の特徴を捉えて、ゆずちゃんの幼稚園で遊んできて楽しかったという気持ち、ゆずちゃんの明るくて元気いっぱいというキャラクター、楽しく話す様子を表している。

〈楽譜『すみれ』①〉



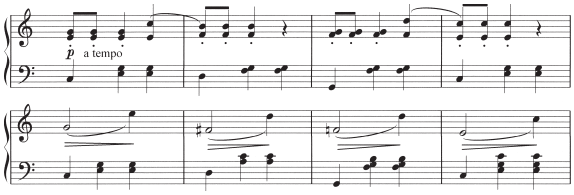

〈楽譜『すみれ』②〉




②（17小節から24小節）…

装飾音がついた高音域の軽やかなメロディとワルツのリズムを捉えて、お花畑でたくさんの妖精が遊んでいる様子と表現している。

〈楽譜『すみれ』③〉

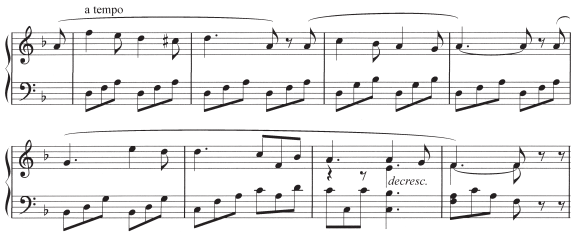



③（37 小節から 44 小節）…
重音のメロディと単音のメロディの部分が 4 小節のまとまりで、問いと答えの形になっている。妖精とゆずちゃんとピーチの会話でのやりとりで表現している。

このように、同じ『すみれ』という一曲の中でも曲の特徴が異なることを捉えてお話の展開に当てはめている。

(2)『忘れな草』
（9 小節から 16 小節）…
ニ短調からヘ長調に転調する。8 分の 6 拍子。ニ短調の悲しい響きを、妖精と別れる寂しい気持ちと目から涙がこぼれる様子で表現するが、13 小節目から明るい響きのヘ長調に転調すると、ゆずちゃんの「また会えるよね‼」という前向きな気持ちと、歩きはじめるという行動で表現している。

〈楽譜『忘れな草』〉




B さんは、『すみれ』、『忘れな草』以外の曲においても音楽の特徴や曲想の変化に合わせて、メロディに対して細かく文章を当てはめている。音楽の明るさや暗さ、拍子、レガートやスタッカート、強弱、伴奏型、曲の盛り上がりなどを読み取り、お話の文章で主人公のキャラクター、行動、心情、情景、天候の変化、色彩などを表現している。曲の長さと文章の長さを調整したり、曲を演奏しない瞬間を意図的に作ったりするなど、お話と演奏の組み合わせを工夫している。

作品創作後の感想では、B さんは「曲を選ぶことから話を作る所までやってみて、自分 1 人で作ることの難しさを知ることができました」と書いている。ピアノ曲の学習はピアノ演奏力を養成する授業で学習出来るが、教育現場で子どもに聴かせる作品を作るのは、このような総合的な表現力を養成する実践型のピアノ学習の授業ではないと経験することが出来ないと考える。また B さんは、作品創作後の感想で「主人公の行動や心情を子どもたちがイメージしてくれることを期待する」と書いており、子どもたちに分かりやすい文章になるよう工夫すると共に、主人公の行動や心情を音楽の構成要素に合わせてイメージしやすいようにピアノ表現を工夫することにより作品を完成させている。

B さんの獲得能力について評価項目からみていく。B さん自身の自己評価から、5 点満点をつけた項目を 7 項目挙げる。評価観点別能力の「意欲・関心」では「4-1）自分で選定した曲の楽譜を探すことができたか」と「7-3）イメージをピアノで表現することに対して、楽しく活動することができたか」である。「思考・判断」では「5-3）ピアノ曲全体を使用するか、部分的に使うか考えることができたか」、「知識・理解」では「4-3）選曲した曲の特徴（リズムや曲の雰囲気など）を把握しているか」、「技能」では「7-2）曲を丁寧に、表現豊かに弾こうとしているか」と「7-3）曲が弾けるように、練習することができたか」、「表現」では「7-2）曲を丁寧に、表現豊かに弾こうとしているか」である。B さんは読譜の能力があるので自分の演奏能力に合った楽譜を選ぶことができている。ピアノの練習に楽しく取り組め、選曲した曲の特徴が把握できるのでイメージを膨らますことができ、表現豊かにすることができる。また曲を作品の中でどのように扱うか考えることができる。B さんの作品では、特に弾いてみたい曲ということもあり、高い

演奏技術が必要となる『RAIN』の楽譜を選び、作品の中に多くを占めている。メロディにおいてシンコペーションのリズムが多く、音域が広く重音やオクターブが多い。伴奏のリズムも複雑で、右手と交差して弾くところもある。授業では、曲のリズムの指導に多くの時間を費やしたが、意欲的に練習に取り組んで弾けるようになっている。

このように全体的にピアノの演奏能力が高いBさんであるが、作品創作後のBさん自身による自分の作品の満足度は、70％であった。作品の出来に関わらず、満足度がそれほど高くない。この原因を、評価項目から探ることにする。評価項目でBさんが3点と低く評価した項目に着目し、特に関係のある内容について取り上げる。「8-2）イメージを表現するために、音の高さや速度を変えるなどの工夫をすることができたか」と「9-1）お話とピアノを合わせる中で、曲の長さや、ピアノ曲のつなぎ部分の工夫、曲やお話の入るタイミングなど工夫することができたか」と「9-3）ポイントとなる言葉と音のタイミングや効果音などを工夫することができたか」については、お話に合わせたピアノ演奏の工夫をすることができたかにつながる項目である。Bさんは、お話に合わせたピアノ表現やタイミングをもっと工夫したかったことが分かる。「11-1）子どもの前で発表することを想定した上で発表できたか」と「11-2）自分の表現したいイメージ通りのお話と演奏の創作ができたか」と「11-3）お話に合わせてピアノ表現をすることができたか」は、発表に関する項目である。感想に「緊張してうまく表現できなかったです」とあるので、反省をこめて低くなっていると思われる。これらの結果から、Bさんの作品に対する満足感を高めるには、お話に合わせたピアノ表現とそのタイミングの工夫と、発表での演奏を意識したレッスンを支援することが重要であることが分かった。

3）Cさんの事例

本授業の最後に、ピアノ担当者ごとのグループで良い作品、または印象に残っている作品を選び出し、その代表者による全体発表会を行っている。Cさんは、その代表者に選ばれた一人である。全体発表の後、履修している学生全員に特に印象に残った作品についてアンケートを実施した。その中でCさんの作品は、「すぐに保育の現場で使用できそう」「子どもたちの反応が見てみたい」「アレンジの工夫が面白い」といった意見が多くあり、保育現場で活用出来るという点で印象に残った作品として挙げられた。

Cさんは保育職への就職を希望している。ピアノは小学校1年生から中学校2年生まで習っていたものの、演奏技術はブルグミュラー終了程度で、あまり演奏技術を生かしたピアノ作品に取り組めるほどでない。お話の創作や物づくりに関しては、保育実習などの場で何度か作ったことがあり、エプロンシアターやフェルトを使った裁縫なども好きだという。本授業を履修した理由として、「保育の現場でピアノは必要であるため、学生時代に継続してピアノを学習することで、実際の現場ですぐ活かせるようにしておきたいと思ったから」と答え、非常に意欲的に取り組んでいた。

授業の中で、今までに弾いた曲・これから弾いてみたいと思う曲を書き出していくうちに、中川ひろたか作曲の『はじめの一歩』を弾いてみたいという意思を示した。この曲は近年卒園式などでよく使用される楽曲であることから、Cさん自身が弾くことができるようになりたいという思いがあったようである。

『はじめの一歩』からイメージする卒園・卒業というキーワードをもとに、小さな女の子が成長していく物語を作ることにした。また使用する楽曲は童謡・唱歌の曲集から選ぶことにした。ストーリーの概略は、引っ越しをした女の子が新しい場所で友だちができるか不安になっている時に見た夢の中で、動物たちによって元気づけられる。そして目がさめた後、自分から勇気を出して声をかけて新しい友達を作る、というものである。女の子の成長を描いた、子どもたちの共

感しやすいテーマを設定している。また、子どもたちにもよく知られている楽曲を用い親しみやすさを感じさせることで、作品への興味を持たせやすくしている。その他にも子どもたちに親しみやすさを感じさせるための工夫が窺える。例えば、作品の中で登場する動物は、当初“ぞう”や“くま”を考えていたが、小さな女の子にとってより身近であると思われる小さな生き物、例えば“ちょうちょう”や“あり”に変更した。子どもの前での発表ということを前提として、この作品では聞き手への物語の理解を促すため、絵本を製作し視覚的にも楽しめるよう工夫されている。扉を開くと生き物が登場するのだが、その扉を開く前に誰もが聞いたことがあるであろう童謡のイントロを演奏することにより、扉の先にいる生き物を連想することができるようになっている。

以下は作品の主な場面構成をまとめたものである。

**(表 9)『はじめの一歩』の場面構成表**

| 場面 | 使用楽曲<br>調性 | 音楽構成要素 | | | | 表現のねらい<br>(感情・動き・様子) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 音の高さ | 強弱 | テンポ | 奏法 | |
| 一人ぼっちの主人公 | しゃぼん玉<br>ニ長調 | ２オクターブ上げる | P | ゆっくり | 悲しげにレガート | 主人公の寂しい気持ち |
| ちょうちょうを見つける | モルゲンレーテ<br>ト長調 | １オクターブ上げる | mp | ゆっくり | 優しく | 夢の中へ |
| 扉を見つける | ふしぎなポケット<br>ト長調 | 楽譜通り | f<br>mf | やや遅い | クラスター奏法で効果音を用いる | 効果音をｆで弾き、驚きを表した曲を演奏する |
| 多くのちょうちょうと出会う | ちょうちょう<br>ハ長調 | １オクターブ上げる | mf | 指定のテンポ | 軽やかに | ちょうちょうと楽しく遊ぶ様子 |
| 蜂のお手伝い | ぶんぶんぶん<br>ヘ長調 | 楽譜通り | mf | 速い | 元気よく | たくさんの蜂が忙しそうに飛び回る |
| ありのお手伝い | ありさんのおはなし<br>ヘ長調 | １オクターブ上げる | P | やや遅い | 可愛らしく | 小さなありを表現 |
| かたつむりとかくれんぼ | かたつむり<br>ハ長調 | １オクターブ上げる | mf | ゆっくり | テヌート | のんびりしたかたつむりの動き |
| 動物たちとのお別れ | はじめの一歩<br>ハ長調 | 楽譜通り | mf<br>cresc.<br>f | ゆっくり | クレッシェンドしてサビから力強く | 勇気を持って歩き出す |
| 夢から覚める | しゃぼん玉<br>ニ長調 | １オクターブ上げる | f | 最初より速く | スタッカート | 友達ができて元気に遊ぶ主人公 |

Ｃさんは作品を制作する過程で、曲をそのまま使用するだけでは、女の子の感情の変化を表現することが難しいと感じていた。そこで、まず各曲の音楽の構成要素に注目し、それを変化させることを試みた。例えば、音の高さやテンポ、レガートやスタッカートなど奏法を変えることで様々な表現が可能になるのではないかと促した。すると、同じ楽曲でも異なった雰囲気を感じられることに気付いた。次に作品の構成として、統一感を出すためにどのような工夫が出来るのか思案していた。そこで、最初と最後に同じ楽曲を使用し演奏方法を変えることで、主人公の感情の変化が聞き手に分かりやすく伝わるのではないかと言葉かけをした結果、『しゃぼん玉』という一つの曲を作品の前後に使用することで、全体的にまとまりのある作品となった。

実際にＣさんの作品に対し、他の学生から「演奏上の工夫の多様さ」についての評価が多く寄せられた。全体を通して、音の高さに変化をもたせ、奏法を工夫することで主人公の感情の変化を表現することに努めた。特に物語の最初と最後に使用した『しゃぼん玉』については、最初の演奏では２オクターブ上げｐで演奏し、最後の演奏では１オクターブ上げｆで演奏した。また最

初の演奏ではレガートで演奏することで女の子の寂しい心情を表し、最後の演奏ではスタッカートで演奏するなどアーティキュレーションに変化をもたせることで、女の子が元気に遊んでいる様子を表し、これらの点についてほとんどの学生から高い評価を得た。しかし、Cさんの自己評価表では、評価項目「10-1）お話とピアノ曲のバランスを考えることができたか」という「表現・技能」の項目は他の項目に比べ5段階評価の3点と低い点数を付けていた。「技能」は、「思考力、判断力、表現力等」の育成と相互に作用しており、単に演奏技術を高めるだけでなく、音楽表現を考えた思いや意図をもたせ、必要に応じたアレンジをすることで補うことができる。

実際にCさんの作品は、演奏があまり得意でないため、簡易伴奏にアレンジしたり、アーティキュレーションの変更やテンポの変化によって楽曲を再構築するなど、様々な工夫をこらすことにより不足している技術を補い完成度を高めた例である。つまり、いかに指が速く動くかといったテクニックばかりに気を取られず、アイデアによって補完することによって、それらが読譜能力の向上に繋がり、より表現力を高めることになったと言える。

次に、本学科の講義概要[4)]に掲げられた本授業の3つのテーマ「イメージの形成と拡大」「応用的なピアノ力」「保育・教育現場への活用」に照らし合わせて分析する。この作品では、『はじめの一歩』という楽曲から連想される〈卒業・成長〉といったイメージから、一人の女の子が様々な体験から勇気づけられ、一歩踏み出すことから得た〈新たな自分との出会い〉へと発展した。また、登場する生き物に合わせて音の高さやテンポの変更がみられ、登場人物そのもののイメージを音楽で表現するなど、ストーリーと音楽が一致した好例である。これは、1つ目の「イメージの形成と拡大」、2つ目の「応用的なピアノ力」と合致しているといえる。

しかし、全編を通してオクターブ上げて演奏することが多く、似通った表現が多くなってしまったのも事実である。例えば寂しさを表現するためには、主旋律のみ演奏してみたり、短調にして演奏してみたりといったアプローチを試みることで、より表現に差がつくのではないだろうか。これらから「応用的なピアノ力」については課題も残ると言える。

3つ目の「保育・教育現場への活用」では、小さな主人公の成長譚であり子どもたちからの共感を得やすいこと、身近な生き物との出会いをモチーフにしたこと、子どもと一緒に歌えるような楽曲を使用したことなどから、実際の保育現場での演奏が楽しみな作品と言える。

＜事例考察＞

本研究の事例に挙げた3名のうち2名は、大学に入る前からピアノ経験が豊富な学生で、1名は途中ピアノ学習をやめて大学から再びピアノを学習した学生である。いずれの学生もこの授業で設定した評価項目の平均値も高い学生である。自分達が表現するものを聞き手に伝えるために、それぞれがピアノ演奏技術だけではなく、楽譜を読み込み、アレンジなどを加え工夫して創作し発表するその過程の中で、評価観点別能力と照らし合わせ分析した結果、それぞれの学生の優れた能力や補う必要性のある能力が見えてきた。

Aさんは多くの曲を学習してきており評価能力では「知識・理解」は平均より高かったが読譜に曖昧なところがあった。楽譜を再度見直し、曲想やリズムなど読譜の学習を深めたことで、さらに楽曲への「意欲・関心」をもち自分が表現したかった物語のイメージにふさわしい曲を選ぶことができた。

Bさんは評価能力「意欲・関心」「知識・理解」「技能」など総合的に音楽能力の高い学生であり、楽譜から音楽的特徴を読み取り、一曲の中でも特徴が異なる個所を捉えて細かく物語の文章を当てはめることができる力がある。また作品に用いた曲を楽譜分析して、使用されているメロディ・リズム・強弱等の曲の構成要素を把握した上で、主人公の心情に照らし合わせ、聴かせる相手にイメージしやすいように作品を完成させている。

Ｃさんは演奏技術についてはそれほど高くなかったが、物語に合うように１つの曲を幾通りもアレンジするなど、創意工夫する力で不足する演奏技術を補うことができた。それにより表現の多様さが生まれ、聴く側へ印象的な作品として完成させることができ、評価能力では「思考・判断」に優れた学生である。

## ４．総合考察

本研究では、どのような表現力が育成され、より表現力を向上させるためにはどのようにしたらよいか論じるために、学生の自己評価を基に習熟度を可視化することを試みた。それらにより、学生のピアノ表現力をより習得させるには「表現」に関する項目のみに着目するのではなく「意欲・関心」「思考・判断」「知識・理解」「技能」の能力が密接に関わっていることが、本研究における評価項目の設定、学生全体平均点の読み取りによって見えてきた。

本授業における評価観点別能力「意欲・関心」の学生全体平均点は、「思考・判断」(3.8 点）に次いで 3.7 点と高い。また、評価項目「7-4）イメージをピアノで表現することに対して、楽しく活動することができたか」についても 4.0 点と高くなっている。学生たちが楽しいという感情を伴って作品を創作できたことが分かる。「意欲･関心」は、他のどの活動を行うにも影響する。「やってみたい、楽しい」という気持ちがなければ、どの活動を行うにも能動的には行えない。「意欲･関心」が「思考･判断」の考える力、「知識･理解」の多くのことを知って分かること、「技能」「表現」の表現したいことについて意図をもって演奏することにつながる。

「思考・判断」は、学生全体平均点で一番高い 3.8 点であった。子どもを対象とした創作活動の中で、ピアノ曲をどのようにお話づくりとマッチングさせるかという点で、工夫、アイデアを考えることができるため、お話づくりにその能力を生かしている。音楽の特徴を捉えてイメージする力が高いため、「知識・理解」における読譜力と、ピアノ演奏の「技能」「表現」に結びつけることができる。

「知識･理解」は、学生全体平均点において 3.5 点と一番低かった能力である。今回の研究によって、表現力の養成において読譜力が一番影響していることが明らかになった。読譜力が向上すれば、学生全体平均点において 3.5 点と一番低い「技能」も楽譜を理解しながら楽しく練習することができ、このように演奏したいという意図をもった「表現」につながる。「知識･理解」と「技能」は平成 29 年の学習指導要領においても高めたい能力とされており、学生のピアノ表現力の養成のためにも重要な課題であると考える。表現力の養成には、評価観点別能力の全てが密接に関わっており、今回の研究ではその根底にあるのは読譜力であることが分かった。それとともに、全ての評価観点別能力がバランスよく指導されることが、これからの表現力の向上で一番必要なことだということが分かった。

## ５. 終わりに

1. で述べたピアノ表現力養成の構造化の在り方[3)] に焦点を当て、それぞれの養成段階や要素における習熟度についても、評価観点別能力と照らし合わせ可視化することで、表現力養成の内容や度合いが明らかになった。本研究において、最も低かった「知識・理解」の能力として考えられるのは読譜力であることは前述の通りである。それを表現力養成の構図に当てはめてみると、読譜力養成の前段階であり、かつピアノ表現力養成全体の最初の段階に当たる音楽構成要素の読み取る力が足りないのが、クローズアップされてきた。それを補うことが読譜力に繋がり、より一層のピアノ表現力養成につながることが判明した。

一方、ピアノ表現力に欠かせない要素の一つに、イメージ力の養成がある。これは読譜力との相関関係にあり、本授業では特に重要視している。想像豊かに様々なイメージを形成していくこ

とは、表現方法を思考したり、工夫したりできる「思考・判断」能力に繋がる重要な段階に当たる。本研究で数値的に高かったのは「思考・判断」能力であることから、イメージ形成の指導は一定の成果があったと言える。イメージ形成の指導としての楽譜情報の読み取りからのイメージ起こしは、人それぞれの経験や環境が異なるため一律ではなく難しい。毎回の授業の中で、教員と学生の対話を通じて、学生一人ひとりの経験や対象である子どもへの想いや気持ちを引き出すことで、学生自身にどう弾きたいのかがしっかりと見えてくるのである。つまり、学生と向き合いながらの読譜を通してのイメージ形成の指導が、表現の意義を見出し、制作意欲を徐々に膨らませ、表現力向上に繋がったのではないだろうか。

本授業では、3. 3）で述べたように、最後に履修者全員で、発表する場を設けお互い聴きあう機会を作っている。創作過程は悩み考える部分も多々あり、自ら主体的に学ぶ厳しさも十分あるが、作品を発表するときは、対象者（観客）や、ともに発表する仲間と楽しい音楽空間を共有することができる。これこそが表現することの真の意味であろう。そして自分の音楽を人に伝えたい、もっと多くの人に感じて欲しいと思うときこそ、さらに創作意欲が増し、深い学びとなる。昨今主体的な学び・対話的な学びが求められているが、これからも総合的にピアノ表現力養成のできる本授業の意義を十分かみ締めながら、筆者らは授業を行っていきたいと思う。

**＜注及び引用・参考文献＞**


1）本廣明美『自己表現力を引き出すピアノ指導研究－段階別プログラムの試み－』山口芸術短期大学研究紀要第38巻　2006
2）本廣明美『表現を楽しむ心を育てるピアノ力養成へのアプローチ～授業「子ども基礎演習」の鍵盤遊びを通して～』山口学芸研究　第6号　2015
3）本廣明美、加藤照恵『教育者・保育者養成におけるピアノ教本のあり方と方向性～オリジナル教本「ピアノ名曲で子どもと遊ぼう」をめぐって～』P.107 ～ 109　山口学芸研究第9号 2018
4）『講義概要』山口学芸大学　2018
5）学習指導要領では、評価観点別能力として「表現・技能」とひとつにまとめられているが、本研究では「表現」に着目するために「表現」と「技能」を切り離して分類した。
6）本研究担当教員4名による、学生22名に対する評価点である。
7）平成29年告示　『学習指導要領』
8）平成30年告示　『幼稚園教育要領解説』